

民間における念佛信仰の受容について

——百萬遍念佛を中心として——

坪 井 俊 映

一

わが國に稱名念佛の思想が傳えられてより、多くの人士によつて種々な念佛思想が説かれたが、これを受け容れる一般民衆の側にあつては、必ずしもその教説の通りに受容され信奉されたとはいうことが出來ず、教を説く者と聞く者、即ち能化と一般大衆との間には斷層があつて、受け容れる大衆の側ではその風俗習慣、或いは民俗信仰に同化して受け容れているのである、從來の日本佛教思想の研究は主として教を説く者の側にあつて研究されているのであつて、聞く者即ち民衆の側よりの研究は極めて少ない。近年、民俗學の一部の學者がこれに注目して研究を進めているのみであつて、日本庶民信仰の研究上、等閑視することは出來ないものである。

それで、いま日本各地において民間人によつて傳承されている各種の念佛信仰のうち、特に全國的に廣く行なわれている

る百萬遍念佛の信仰について、これが民衆の間においていかなる形態をもつて受け容れられているかを見ん

百萬遍念佛の創唱者は惠心や良忠等によれば中國の道禪師であるとしている。⁽¹⁾しかし道綽の傳記並にその著書を見るに、念佛に關する數量信仰は説いているが、稱名念佛壹百萬という數量は説いていない。これが念佛の數量壹百萬と明瞭に數量を説き示したものは迦方の淨土論である。それによると、「若人念阿彌陀佛得百萬遍已去決定得生極樂世界」とか、

又は「若能七日念佛滿百萬遍即得往生也」といい、さらに「專稱佛名一心不亂至百萬遍者臨命終時正念現前佛即來迎⁽²⁾」とかいって、淨土往生の業として百萬遍の稱名念佛をすゝめてゐる。

本邦において平安中期以降、淨土教の盛行にともなつて、念佛の數量信仰が盛んになり、續本朝往生傳、後拾遺往生傳、

三外往生傳、本朝新修往生傳、高野山往生傳等を見るに、念佛行者にして淨土往生の業として百萬遍念佛を修行したものの多數あったことを伝え、かの恵心僧都も續本朝往生傳によると示寂する長和二年七十二才までに、念佛二十億遍、大呪百萬遍、千手呪七十萬呪を稱えたい³う。また、藤原兼實は玉葉によると安元二年九月八日より十五日までの七日間、阿彌陀經の一七日の念佛説によって百萬遍念佛を行じている。しかし、實際は十七日までかゝり、前後十日間で念佛百萬遍を満了している。さらに兼實は嘉應元年九月にもこれを行ない。前後十五回も百萬遍念佛を修したとしている。この百萬遍念佛は當時一般の社會風潮たる現世安穩後生善處を祈念して行つたものと考えられる。

二

かくの如く百萬遍念佛信仰は中國にて淨土往生の業として創唱されたものであるが、現今わが國の各地において民間人が中心となつて行なわれている百萬遍念佛を見るに、これには迦身の淨土論や上記の各種往生傳に見られるごとき淨土往生という考えは全然見ることが出来ない。現在わが國において廣く民間に行なわれている百萬遍念佛は家内安全、部落安全、病氣平癒、無病息災を祈念するほか、先亡の追修儀禮として行なわれ、さらに農耕儀禮と深く關係して、雨乞い、虫送

り、虫供養、五穀豐穰を祈念するために行なわれている。しかのみならず、恵心や兼實や各種往生傳に記載されている百萬遍念佛行者は、個人の往生業として、一人が百萬遍という數量念佛を行つたのであるが、現在のそれは個人ではなく集團として行なれ、宗派のいかんはほとんど問われていないのが一般である。いま日本全國に廣く行なわれている百萬遍念佛信仰をその意圖目的によって信仰形態を區分して見ると大體、次の三型態に分けることが出来る。

一、攘災招福儀禮としての念佛

二、先亡追修儀禮としての念佛

三、先徳の報恩儀禮としての念佛

初めの攘災招福儀禮としての念佛とは、主として家内安全部落安全・病氣平癒、雨乞い虫送り五穀豐穰等のために行なわれているもので、ほとんどが部落集團が單位となつて行なわれている。これは集團人が唱和する念佛及びそれに使用する大念珠に神祕的な呪術力を認めて、それによって家内安全五穀豐穰を祈願するものである。これは全國的に見て天台宗眞言宗（主として智山派豐山派）の寺院に屬する檀信徒の部落に多い。この念佛行事は部落の年中行事として中かば公共的性格を帯びて行なわれているものが多く、正月の行事としては春祈禱、初念佛講とか呼ばれ、大體正月十六・七日頃、地方によっては舊曆でこの日に行なっている。

高知縣土佐清水市三崎町 香佛寺よりの報告によると、

「毎年正月十六日に在家の當番の家、時には寺の佛堂において部落各家より一人宛の割で參集して百萬遍念珠を繰って念佛を唱え一年間の部落安全を祈願し、農家ではこれが終つてから仕事を初める」といい、念佛がすんだなれば「利劍の名號」のお札を各家にくばるといふ。正月又は舊正月に部落安全を祈願する百萬遍念佛はこのほかに高知縣宿毛市、同室戸市、大分縣佐賀關市、同佐伯市、鳥取縣若櫻町、島根縣仁多町、その他關東、東北地方においても、期日に多少の相違はあるが、一般に農山村に廣く見られる例であつて、「奉唱彌陀寶號一百萬遍成就所」又はこれに類似すること書いた御札を各家にくばり、家の入口にはるのが一般の例である。このほか大札を青竹にはさんで部落の上下入口に立てるところや、道路の境に塔婆を立てる處もあり。これは正月の神事がすんでから行なう佛教的な年初の行事であつて、百萬遍念佛によって部落の安全を祈願する極めて呪術性の強い念佛信仰である。

五月について部落の年中行事化しているものに、田植前後に行なう「虫送り念佛」「五穀豐穰の念佛」と、これに續いて行なう「疫病退散の念佛」とがある。高知縣宿毛市淨土寺よりの報告によると、「毎年一月十六日に春祈禱の百萬遍念佛をつとめ、五月には虫送り念佛を行ない、八月一日には夏祈禱といつて惡疫退散の百萬遍念佛をつとめることが部落の年中

行事になっている」といふ。この虫送り念佛は所によつて、虫供養念佛という處もあり、また根付ケ念佛と稱する處もある。いづれも五穀豐穰を祈念して行なう念佛行事であるが、この行事に惡疫退散の意味を含めて行なう處もある。この虫送り念佛は岡山縣、香川縣、愛媛縣下の瀬戸内側に盛んに行なわれていて、その他高知縣、熊本縣、千葉縣及び中部東北地方において米作中心の地方に行なわれている。

いま岡山縣淺口郡富部落（現在は岡山縣玉島市字富）に行なわれている「虫送り百萬遍念佛」を見ると、これは部落の公民館（昔しは當番の家）で部落民が一戸一人の割で全戸のものか參加して行なう部落の年中行事になつていて、大體毎年田植終了の直後（七月一日か二日）に行なう慣習になつてゐる。初め部落の代表者が檀那寺である鴨方明王院（天台宗）へ行つて寺にある百萬遍大念珠をもらひ受けてくる。この時、寺では大念珠に加持をする。部落へ持ち歸つたなれば公民館において部落全戸のものが參加して、圓陣をつくつて百萬遍念珠をくる。般若心經三卷稱えて念佛し、念珠を數回まわす。本尊佛は祀らない。勿論寺の住職も參加しない。部落の代表者がこの行事の全指揮をとる。念佛が終つたなれば一同は大聲で「ファア」と呼んで大念珠をさしあげる。その後約二米餘りの笹竹に「奉唱彌陀寶號谷中安全 五穀成就所修蛇蛇及蝮蠍氣毒煙火燃念彼觀音力尋聲自廻去雲雷鼓掣電降電澎大雨念彼觀音力應時得

消散」という法華經普門品の一句を書いた白い長い紙を結びつけ、これを先頭に大念珠を数人がかついで、「ナンメード」「ナンメード」と唱えながら部落の各家を一巡する。このとき氏神である八幡社の社殿を七回廻る。部落の各家には勝手口に入って念佛し、中には座敷より勝手口へ數珠をかつぎながら通り抜ける家もある。かくして、全戸を廻り終ったならば村端れにおいて、再び部落民一同が集って道路の上で念佛し大念珠をくる。そして最後に「ワアー」と大聲を出して大念珠を高くもちあげる。これでもって虫送りの念佛行事は終りである。この富部落は淺口郡の北山の端にあり、この地方では虫送り念佛はこの部落に初まつて次第に下の部落に大念珠を送っていく。この虫送り百萬遍念佛はこの地方に廣く行なわれている念佛であつて、田畑の惡虫の追放と五穀豐穰を祈り、併せて暑中におけ惡疫退散を祈つて行なう行事である。而て、百萬遍念珠をもちあるき、また各家々に立寄るのは田畑に災する惡靈及び各家にいる厄病神、災いの神をこの百萬遍大念珠に吸いとるためであり、最後に村端れで「ワアー」と大聲を出して念珠をさしあげる事は、大念珠に吸いとつた惡靈惡神を村から追ひ拂うためであるといわれている。そして、この念佛行事を行なわなうときは農作物の出來も悪く、また悪い病氣がはやるといいならわされている。

このように道路にて念珠を繰り、また持ち歩く所は、上記

のほか左の地區にも見られる。即ち、
高知縣室戸市室戸岬町。同縣高岡市越智町。
香川縣觀音寺町豐田町。千葉縣安房郡鴨川町。
千葉縣印播郡松虫。埼玉縣岩槻市慈恩寺。
茨城縣茨城郡神谷。福島縣相馬市中村。
山形縣東田川郡羽黒町。秋田縣仙北郡藤木町。
青森縣津輕地方。その他

このほか數例があるが、中には「四五年前まであつたが今は行なわれていない」という報告もあり、次第に衰微しつつある行事である。

しかし、農山村の古老の間には未だ根強い信仰となつて傳わっている行事である。これは唱える念佛並に持ちあるく大念珠に神祕的な呪術力を認めて、これによって田畑や家屋内にいる惡靈惡神を追ひ拂わんとするものであるが、農作物が不作になったり、村に惡疫が流行することは、古來素朴な村人は惡靈や惡神の仕業と考えたのであつて、かゝる惡靈惡神を追放するために百萬遍念佛が行なわれるのである。これは素朴な呪術信仰の上に受け容れられた念佛の一例である。

このように唱える念佛と繰る百萬遍念珠に神祕な呪術力を認める信仰は病氣手癒の念佛や大念珠にふれることによって身體が健康になり、痛める患部がなおるといふ信仰を生み出すばかりでなく、千天の時には雨乞念佛となり、さらに人間

の安全を祈るばかりでなく家畜牛馬の無事息災を祈念する牛念佛（三重縣松坂市貞松寺）なるものを生じた。しかしながら、かくの如き素朴な民間念佛信仰は最近の科學思想の普及、農藥や還境衛生の整備によって急速に衰えつゝあり、かつて道路で行なわれた虫送り念佛が虫供養念佛に轉化して寺院において行なわれるようになり、祈禱的呪術念佛が田畑にて殺戮された虫の靈を弔う追善供養の念佛として存続している處もあれば、そのまゝ廢絶した處もある。

三

次に先亡追善儀禮としての百萬遍念佛とは主として、在家にて祖先の追福のために行なわれる念佛であるが、これまた全國的に廣く行なわれ、年中行事としては春秋兩彼岸及び盆に行なわれるほか、月並の念佛講がある。さらに部落民又は講員の死亡にあたり、葬式中陰速夜年忌において臨時に行なわれている。場所は葬式の時は主として在家であるが彼岸盆の場合は、寺院佛堂或は在家で行なれる。新潟縣見附市片桐村では春秋彼岸の七日間、念佛講員の家を順次廻つてつとめるといい、また彼岸中の一日をとつて部落民が寺集まつて先亡追善のために念佛する所もある。さらに念佛講なる組織をつくり、講員の家にて毎月定期的に集つて百萬遍念佛を行なう處もあり、この先亡追修儀禮の百萬遍念佛は農山村において

根深い念佛として残っている。さらに講員の一人が死亡したときには全講員が集つて葬式の中陰速夜に百萬遍念珠をくる例は現に廣く見ることの出来るものである。この先亡追善の念佛信仰の底に流れているものは亡靈信仰であつて、もし先亡者に追善の念佛が行なわれなかつたときは、その祖先は子孫に對して追善供養を要求し、子孫に何等かの災いをなすという信仰である。ことに不時の災害や非業の死をとげた人には特に丁重なる追善供養をして弔らねばならぬという亡靈信仰がその基となつている。近世に著わされた念佛上人の傳記を見ると亡靈（幽靈）が上人の念佛教化によつて得脱したという説話が多く見られるものかゝる信仰によるものと考えらる。それでこの先亡追修の百萬遍念佛なるものは亡靈信仰という基盤の上に受け容れられた念佛信仰と考へるのである。

第三に先德の報恩儀禮としての百萬遍念佛とは法然上人、德本上人、幡隨意上人等の念佛の祖師に對する報恩謝德のために行なわれる念佛である。これには御忌講、德本講、幡隨意講、慈教講、明照講等の如きものがあり、いづれも講組織になつていて、毎月定例に百萬遍念佛を行つてゐる。このうち德本講は德本上人、幡隨意講は幡隨意上人、御忌講慈教講明照講はいづれも法然上人の遺德をしのんで行なう念佛であるが、そのうち幡隨意講の如きは本來、幡隨意上人の遺德を崇めて行なう念佛行事であつたが、いつしか攘災招福儀

禮に變つたものもある。幡隨意講は宮崎縣延岡市一圓の部落に廣く行なわれ、各部落ごとに講があつて延岡市三福寺開山堂にて毎年舊五月五日につとめるほか、毎月部落の各家廻り持ちで當番となつて、その家で行なわれるが、現在は火難水難病難を免がれるといひの信仰に變つてゐる。そして火除けの獲符を寺へ受けに参り、漁師は水難除けの護符を、流行病のはやつたときには息災の護符を受けに來る人が多いという。

この例は筑後善導寺においても見られ、善導、法然、聖光の三上人を祀る三祖堂が安産のホトケと信じられて婦人の參詣者が多いといわれるのと同様である。善導寺の三祖堂は三祖が産祖に通じ、また三祖の「サン」が安産の「サン」に通ずる處より生れた信仰と思われるが、幡隨意講の火難水難除けの信仰は二河白道の譬喩をもつて説く念佛信仰が轉化したものであらう。

かくの如く祖師讚仰の念佛信仰が攘災招福の念佛に轉化したものは別として、念佛上人が地方を教化された遺法をいまに傳へ、同信同行の集りとして堅い念佛講組織をつくつてゐる處は少なくない。山口縣萩市にある蓮友會淨友會なる念佛講は大日比三師の勸化による遺法を傳えるものであつて、大薫香一本が立ち消える間、念佛するという厚い信仰をもつた團體である。かゝる祖師讚仰の念佛講なるものは同信同行の祖を崇めるものであるが、これは日本古來の氏神信仰と同じ

考えにあるということが出来る。氏神信仰は同じ氏の祖、同族の祖先を崇める信仰であるが、かゝる信仰と念佛講員が同信同行の祖として念佛の祖師を崇める觀念とは同じであつて、同族とし血縁地縁家縁の關係を重視するか、同信同行として同じ信仰を重視するかの相違である。現在淨土宗において御忌講なる信仰組織が地方に多くあり、眞宗において報恩講なる行事によつて同信同行があい會して、根強い念佛信仰を形成してゐるのは氏神信仰という日本固有の民俗信仰の上に形成された祖師信仰であると考えられる。かゝる祖師信仰は中國において見られないものであつて、日本佛教の一特色とすべきものであらう。

上述の如く、現在日本において行なわれている百萬遍念佛信仰の受容を三類型に分けて考察したが、攘災招福儀禮としての念佛も、先亡追善の念佛も、祖師讚仰の念佛もいづれも百萬遍念佛思想本來のものでなく、日本固有の民俗信仰によつて同化して受け容れたものであることが知られる。

- 1 拙著百萬遍念佛考（佛教大學研究紀要四十二、三合併號、二五〇頁）

- 2 名畑順應博士校訂迦才淨土論（三七頁以下）

- 3 續本朝往生傳（續淨六卷二三頁）

（昭和三十九年度文部省科學研究費による各個研究の成果の一部である。）